

# 静岡県で活躍する医師



聖隷浜松病院

救命救急センター長／救急科

渥美 生弘 医師

## 医師をこころざしたきっかけを教えてください。

**渥美医師** 父が医師であったことでしょうか。  
私は中学生の時に虫垂炎になりました。自宅で様子を見ながら（点滴しながら）症状の悪化があった際に病院受診し、すぐに手術を受け回復することができました。身近に医師がいることの安心感があり、今思うと、この経験が医師になるという選択をした背景にあるのではないかと考えています。

## 現在の診療科を専攻したきっかけと魅力を教えてください。

**渥美医師** 医師になったからには緊急事態に対応できるようになりたいという思いがありました。  
大学6年生になる春休み、日本医大に1週間の見学実習に行きました。  
警察庁長官の狙撃事件が発生し、その日本医大に搬送されてきました。目の前で瀕死の状態にあった患者さんが救命されるのを目の当たりにしました。  
当時、救命救急センター長だった辺見先生が「私は銃創で患者を失ったことはありません」と言っていた姿があまりにもかっこよく、救急医になりました。

## 現在のご勤務先での現況について（印象や取組まれていること等）教えてください。

**渥美医師** 救命救急センターとして常に重症患者に対応できるような体制整備をすすめています。  
救急医が集中治療医としてICUに常駐し、重症患者に対しては各科専門医と協働して全身管理を行っています。内科・外科の当直医と共に集中治療医が一緒に対応することで、いつでも重症患者に対応することが出来るようになっていきます。  
当院のICUは日本集中治療医学会の専門医研修施設に指定されており、集中治療専門医の取得が可能です。救急医が集中治療を学ぶことで、救急外来での診療能力も向上しています。  
外科に所属する Acute Care Surgeon や、手術室



スタッフ、放射線技師、検査科等と協働し、初療室にて止血術に対応できる体制を整備しました。救急隊から重症外傷と思われる情報が入った際には、レントゲン検査、緊急輸血、開胸開腹手術を患者が病院に到着する前に準備するトラウマコードを宣言します。オーバートリアージも許容した上で多職種が救急外来に集合し、必要時には患者が病院到着した直後から止血術が開始できます。

一方で、患者自身はこの先どうなるのか不安であり、そして患者の急変を目の当たりにした、そのご家族も動揺していることが少なくありません。当院ではそんな患者や家族を支える、患者・家族支援チームが活動しています。辛い状況の中にある患者・家族が病状を理解できるようお手伝いし、医療チームと一緒に目標を考え、病気と向き合い、治療に参加してもらえよう体制を整えています。

あらゆる重症疾患に対応すると共に、患者ひとりひとりに最適な治療を行い、患者やそのご家族が少しでも安心してできるように、多職種と連携をとって診療しています。

## —— 若手医師との関わりや指導について教えてください。

**渥美医師** 特別な対応はしていません。救急外来には年間 16,000 例程度の患者が来院します。軽症から重症まで、緊急度の低い症例から高い症例まで、様々な症例を経験できます。上級医とともに多くの経験を共有し、毎日新たな発見の繰り返しです。上級医も、若手医師と一緒に日々研鑽を積んでいます。

## —— 医師を目指す方や若手医師にメッセージをお願いします。

**渥美医師** 救急外来に来院する患者は様々です。瀕死の状態にある患者ばかりではありません。救命のために病院の総力を挙げての対応を迫られる患者もいますが、医療ではなく福祉相談が必要ではないかと思われるような受診もみられます。どの事例も、それぞれ患者、ご家族は困って救急外来に来られます。救急には医の原点があると感じます。自分が医師として患者のために何が出来るのか、医療だけではないように思います。患者のニーズを探りひとりひとり丁寧に対応していく時に、患者から学ぶことが多い事にも気づきます。私自身、今も毎日新しい気付きを頂きながら、新鮮な毎日を過ごしています。救急科の専門医にならなくても結構です(なってくると嬉しいですが)、ぜひ一緒に救急外来で働きましょう。



### プロフィール

## 渥美 生弘 医師

趣味

・スキューバダイビング

1996年 弘前大学卒業  
1996年 日本医科大学附属病院高度救命救急センター  
2002年 脳神経外科学会専門医  
2004年 救急医学会専門医  
2008年 神戸市立医療センター中央市民病院救命救急センター  
2012年 集中治療医学会専門医  
2015年 聖隷浜松病院救命救急センター